

比較社会学



Akihiko Kato 加藤彰彦

Profile

加藤 彰彦(かとう あきひこ)
 明治大学政治経済学部准教授/比較社会学、社会学、専門演習
 1964年東京生まれ。東京都立西高等学校、早稲田大学政治経済学部、同大学院文学研究
 科社会学専攻単位取得退学。株式会社東京銀行(現三菱東京UFJ銀行)、帝京大学文学部
 社会学科専任講師を経て現職。専門分野は、比較社会学、家族社会学、人口学。博士(文学)。
<http://www.kisc.meiji.ac.jp/~katozemi/>

— 先生が教えられている「比較社会学」というのは、どういう学問なのか。

加藤 比較社会学は、自分が生きる社会について知る学問です。「社会に秩序を生む『原理』を探究する」というのが社会学の基本姿勢ですが、それを比較という手法で研究しています。ただ、エミール・デュルケームが「全ての社会学は比較社会的である」と言ったように、社会学は元々比較をする学問なのです。あるひとつの社会の基本原理は、他の社会と比較することで浮かび上がってくるものです。例えば日本の社会と、イングランドやアメリカなんかの社会を比べてみると、いくつかの相違点が見つかります。また、ドイツやイタリアなどの「枢軸国」と比べてみると、共通項を見つけることもできます。そうすることで、日本社会の特徴が際立ってくるわけです。比較社会学という学問を通すと、社会の土台を見極めやすくなるということですね。

— 先生は「比較社会学」の授業を通じて、学生に何を伝えたいですか。

加藤 「汝自身を知れ」ということです。これを私の授業の目標にしています。特に、自分の生まれ育った「日本」という国を、歴史的・世界的な視野で、深く理解してほしいですね。歴史を遡って、根本から日本の成り立ちを理解する。あるいは、他の社会と比較することで日本社会の特徴を捉える。そうして得られる基本的な知識を踏まえて、日本の将来を予想し、自分の人生を思い描くところまで行ってほしい。それが最終目標です。

— 先生は学生時代をどう過ごされましたか。

加藤 大学1・2年生のうちは、高校生の時から続けている山登りや、合唱のサークル活動をしていました。3・4年生のときは海外に出ました。「バックパッカー」といって、予約なしの航空券とリュックだけで欧米やアジアを

気の向くままに旅しました。インドを横断したときには、赤痢にかかってしまい、大変な思いをしましたよ。同時に空港ストが起こって足止めされたりして。命からがら帰国して隔離入院させられた病院で、インドで知り合った人と再会する、なんてこともありました(笑)。当時はバブル絶頂期でお金が余っていたから、就職内定者ローンなんていうのもありました。それでお金を借りたりして、のべ1年間、世界を飛び回っていました。



— 明大生のいいところは何かと思いますか。

加藤 「仲間がいると、個人以上の力を出せる」ことです。明大生は個人で行動するより、仲間を作って連帯し団結してこそ、本領発揮できると思っています。これは明大生の伝統的な特徴でしょう。集団の中で様々な人と関わって、自己の役割をしっかりと果たし、リーダーシップを取る経験を積む。それこそが、明大生の目指す「『個』を強くする」道につながるのではないのでしょうか。例えば、明治維新の前って集団主義的なイメージがどうしても強いじゃないですか。でも、明治維新を起こした個性的な傑物たちは、そうした集団の強い社会の中から生まれたんですよね。今の社会からは、そういう大物が出てきません。みんな小物になってしまいました。明大生は仲間を作って自治をするといいですね。やはり、サークルやゼミがいい例だと思います。その中でリーダーシップを発揮できる人こそ、社会に出てからも周

囲からの信頼を得て、「個」を発揮できる人なんだと思います。

— 新入生に伝えたいことはありますか。

加藤 今、日本では「歴史の転換点」と言えるほど、社会の土台の変化が生じています。これまでは人口増加、経済成長の時代でしたが、これからは人口減少、下り坂です。そんな時代だからこそ、正しく日本社会を知って、その上に未来を築いていってほしいですね。学生生活をどう過ごすかは自由です。でも4年になるころには就職活動をしますよね。その時に、自分が「何をやりたいか」迷ったら、過去を振り返って自問してください。「この3年間に一番時間とエネルギーを注いだことは何か」と。つまり、これからの大学生活での「生き方」が、3年後、あなたに将来を指し示してくれるということです。学問や何かの活動に全力投入したならば、将来はその延長上に開けていきます。一方バイトと遊びに明け暮れた人は「自己実現」など考えずに、消費生活をエンジョイできる仕事に就けばいいでしょう。

大学生生活は4年間です。時間と力は無限ではありません。優先順位を決めて、時間を有効に使いましょ。具体的には、まず図書館に行くこと、そして現場に出かけることです。本なら、特に古典の名作を読みましょ。ぜひ「自力でやる」ということに挑戦してください。

